整理番号：2023037

【研究概要】

NASCET 法、1990 年で症候性 70%狭窄、無症候性 80%以上で、頸部内頸動脈内膜剥離術の有効性が示された、また stent 留置術の非劣位性が示された。内腔計測による NASCET 法では治療適応判断には不十分である。現在は動脈硬化巣の性状観察が進歩した。治療効果は脳梗塞の予防あるが、画像的には動脈硬化巣消失、動脈硬化巣血管内膜面 fibrous cap 形成、も重要である。本研究は NASCET 法 70%未満狭窄脳梗塞危険例に対して外科的介入を行う適否を明確にする。